

Faux amis (フォザミ) 考

高橋 純

あるコトやモノに対してこれを指し示す言葉が少なくとも一つはあるものだ。そして複数の異なる言語があり、それぞれの言語の間に対応関係が探られると、その結果外国語の辞書が出来上がる。他方、一つの言語(例えば日本語)のみを取り上げてみると、そのなかのひとつひとつの言葉は、それを使う人間にとって母語に属する語彙であることもあれば、他の外国語の語彙からの流用で間に合わされたものであることもある。むろん両方あることが圧倒的に多いが、後者のケース、つまり外来語を用いてしか指し示すことのできないものもたくさんある。今どき「コンピュータ」と言う代わりに「電子計算機」と言う人はいないだろう。また将来「パソコン」という語を日本語に翻訳しようとする人が現れるとは想像しにくい。それよりむしろ、パソコン(←パーソナル・コンピュータ)という省略的表記がすでに翻訳であり日本語にほかならないと考えるべきなのかもしれない(日本語をまったく解さないアメリカ人は「パソコン」と聞いても何のことかわからないだろう)。いずれにしても、自国の純正部品か他国の類似製品かを問わなければ、ひとつひとつのモノ・コトに対応する言葉を持つことによって各々の言語はそれぞれなりに一貫し完結した意味の世界を形づくる。

ところが、複数の異なる言語が会おうと、言葉とモノ・コトとの対応関係にしばしば少なからぬズレやねじれが生じるものである。異なる言語同士の間で音やかたちが酷似しているが意味が異なっていたり、あるいは語源も意味も無関係という faux amis (空似言葉：原義は「見かけだけの友人」というものが見られるのがその例である。

英語には *corpse* という語があり、フランス語には *corps* がある。どちらも人間の体を表すことができるが、*corpse* は死体であり *corps* は生体を指すので混同してはいけない。*Christian* は英語でもフランス語でも大文字で始めるが、「彼はクリスチャンである」という表現は、フランス語では「彼の名前はクリスチャン」、英語では「彼はキリスト教徒」ということになる(フランス語の *Christian* はキリスト教徒を意味しない)。*chair* という綴りが英仏両語にあるが、英語では「椅子」だがフランス語では「肉」(前者はフランス語なら *chaise*、後者は英語なら *flesh*) とまるで別物を表すので取り違えると滑稽なことになる。

faux amis (フォザミ) の存在は、その類似や差異が記憶と連想の手がかりにもなるので、言葉(必ずしも外国語とはかぎらない)を覚える助けとなる。まったくの創作かもしれないがよく知られた話がある。あるアメリカ人が日本に旅行することになり、来日前に挨拶言葉くらい知っておこうということで、御礼の言葉は「アリガトー」というのだから *alligator* (アリゲーター：鱷) として覚えたら忘れまいと考えた。確かに、(話者の頭の中で) 特定の意味に結びつかない音の連鎖は雑音に過ぎないので、そのままでは覚えづらいのだ。私も時々似たようなことをする。フランス語でケーキ類のお菓子は *gâteau* (ガトー) で男性名詞だから、不定冠詞をつけて使えば *un gâteau* (アンガトー) ということになる。そこで学生には「お菓子をもらってアンガトー」と覚えればよろしいと教える。多くの学生は寒がるが、それなりの有効性はあると私は信じている。

件のアメリカ人は来日後、習い覚えた日本語でこそぞという場面で日本人に感謝の意を伝えようとしたら、元気よく口をついて出たのは「アリガトー！」ではなくて「クロコダイル！」だったという。crocodile も 鱷 に違いない。音の連想と意味の連想が交錯して、音の上では無関係な言葉に行き着いてしまったのだ。このアメリカ人にとっては、同じ種類の動物といっても alligator より crocodile のほうが近しく感じられたのかもしれない。この手の言い間違いはわれわれが母語を使うときよりも外国語を使う場合に多発するのは当然だろう。いまだ音と意味のつながりがゆるいので、記憶の連鎖が思いがけない方向に向いてしまうことがあるからだ。

ある女性（フランス語のできる若い日本人）と話していたときに（結婚したら姓を変える変えないというような話の途中で）、その人が「フロマージュっていろいろな問題がからむでしょう」とおっしゃった。「フロマージュ」がフランス語の fromage^{フロマージュ}ならば、チーズがらみの問題とは何だろう。私が「ハア!？」という顔をしていたら、すぐに「mariage^{マリァージュ}（結婚）です！」と訂正されて納得した。彼女にとっては、花より団子と同じで、当面 mariage より fromage のほうが気がかりだったということかもしれない。

類似の言葉との取り違えである言い間違いは話者の無意識が絡んで生じるものであって、mariage と fromage が faux amis（空似言葉）の関係にあるわけではない。対するに faux amis はその存在と関係性を客観的に説明できるものである。われわれが faux amis を間違えて使ってしまうのは意味の相違をきちんと把握しないまま言葉を使っているからだ。そのとき、既習得の知識を動員して見当をつけるので、その間違いには人それぞれの経験に基づくそれなりの根拠があるのが普通であって、まったくデタラメの間違いばかりというわけではない。travail（フランス語でトラヴァーユ：仕事）という語に出会うとほぼすべての学生は travel（英語のトラヴェル：旅行）のことだろうと想像する。間違いには違いないが、同系列の言葉なのだから無理もないのである。語源が共通するのだから、（予習してきていないのを責めることはできても）いい加減なでまかせを言うなどはいえないのだ。むしろ類推をさらに進めて travail（英語のトラヴェイル：骨折り）を思い出させてやるほうが親切というものだろう。こうした類推や連想は言葉の学習にはとても重要である。間違いはその過程で直していけばよい。語学は間違えるほどに上達する。たくさん間違いはたくさん実践と学習の証である。というわけで学生にはこうした当て推量を奨励している、少なくとも初心者に対しては。

意味がわかっているならば日本語であろうが外国語であろうがコミュニケーションのための道具として活用すればよい。しかし、意味は分かっているつもりで使っているが、本当はそれを使っている当人にも出自が定かでない言葉というのがたくさんある。「泥縄」という言葉の由来（←泥棒が出てから縄をなう）は誰でも知っているかもしれないが、では「泥棒」あるいは「泥坊」についてとなると知っている人は少ないに違いない。だが怪しむ様子もなく誰もが使っている。道具は使い勝手がよければ、それが木製であるかプラスチック製であるかは二の次である。言葉についても同様で、言葉の用法を知ることとその言葉の意味を理解することとはほぼ重なり合うので、ひとたびその使い方がわかると、通常はさらにその出自、要するにその語源までたどることはしない。自分の母国語についてならなおさらである。私も自分が使っている日本語の語彙の語源などほとんど知らないくせに意味は了解しているつもりで何とか使いこなしているから、わざわざ辞書を引いて言葉の由来を確かめることなどあまりしない。しかしやはり、（特に外国語の学習に

においては) faux amis を連想し識別することとも関連して、言葉の出自を知ることは、必須ではないが、有益ではある。言葉の意味と形の変遷をあとづけることは連想を働かせるのと同様の効果をもたらす、類似や差違の認識を通してその言葉がよりしっかりと記憶に定着するのを助けることになるからだ。言葉は歴史の中で生まれ、現在まで生きてきたからこそわれわれが今出会っている知的・精神的生活のパートナーのようなものだから、そのパートナーをよりよく理解すべくその来歴に思いをはせるということはある。そして、言葉によって、その出自は由緒正しい場合もあるがかなりいかがわしいものもある。言葉の出自を探究する学問は歴史言語学であるが、われわれ一般人は、なんとなく辻褄があっているように思われれば納得し、加えてそれが面白おかしければ満足する。まずは記憶に残ればよいのだから。

完全な faux amis というのは英語の chair とフランス語の chair のような場合であり、そのほか意味やかたちのズレや重なり合いには様々なケースがある。(これを話すと私は自分の怠慢を指摘されることになってしまうのだが) フランス人の友人から、「泥棒：ドロボー」の語源はフランス語の「dérober：デロベ：盗む、掠め取る」なのだと教えられた。いまだその真偽を確かめたことはないが、深く納得してしまい、学生にも話したことがある。ひょっとしたら学生に嘘を教えたのかもしれない。しかし、結果として学生が覚える語彙が増えるなら、そんな冗談も許されるだろう。それにこの語源説は真実かもしれないではないか。私にはこれは、「アリガトー」の語源はポルトガル語の obrigado (オブリガード：ありがとう) だといういかにももっともらしく同時に嘘っぽい説より本当らしく思われたのだ。

いずれにしても、faux amis は同族の言語間でのみ生じる現象ではなく、ある言語がまったく語族を異にする外国語と出会うことから生まれると想像することができる。「un gâteau=アンガトー」の駄洒落はその一つだと主張したい。こうした faux amis の場合には、かたち(音)の類似は当然ながらまったくの偶然であり、基本的には意味の対応関係はなく、逆に、意味が対応していると今度はかたちがまったく異になってしまうのが普通である。フランス語の chapeau (シャポー：帽子) が「シャッポ」と化して日本語辞書に定着したのは、「兜を脱ぐ」という言い回しにぴたりと重なるフランス語の言い回し (tirer son chapeau：脱帽する) があつたせいで「シャッポを脱ぐ」という表現が日本語として成立した結果であろう。「兜」と chapeau は隠れ faux amis なのだとさえ言えない。

このように語族を異にする言語間に生まれる faux amis は時に、もはや誤解とも正解とも言い難い奇怪な認識をもたらすことがある。昔、岩波文庫についてくる葉でも紹介された話だが、明治時代に編纂されたある辞典には、英語では犬のことを「カメ」と呼ぶとある。その葉の記述は正確に覚えていないが、大槻文彦著『言海』(明治22年刊)には「カメ(名)〔英語、Come. (来よ)ノ誤解〕西洋渡来ノ犬」という記述がある。現在の広辞苑(岩波書店、1991年刊第4版)にも「カメ」は健在で、「(幕末・明治初期、英米人が come here といって犬を呼んだことからという)洋犬のこと」とある。さらに一例として『西洋道中膝栗毛』が挙げてあるので、仮名垣魯文作のその本(明治3年)を見ると、確かに「當時海岸通りじゃアおれが面を見りゃア異人館の洋犬までが尻尾をさげる渡海屋の……」というくだりで「洋犬」に「かめ」とルビが振ってある。当時の誰もが本当に犬は英語でカメというと思っていたのだろうか。ちょっとありそうもない。『言海』でも誤解と説明されているし、古賀達也氏の指摘によれば、文久三年(1863年)刊の『横浜奇談』

ですすでにこれが誤解であることが明かされているということである*¹⁾。Come here (カムヒヤ) が「カメヤ」という呼びかけに聞こえたわけだが、このことは「亀」という語を知っている日本人には面白く感じられただろう。日本でもある地方では犬を「カメ」と呼ぶことがある事実を知っていた人にはなおさらのことだ。そこで誤解を承知で使ってみたくもなったのかもしれない。『西洋道中膝栗毛』の本編を読んでみれば、作者が英語をよく解したことは歴然としているので、「カメ」とルビを振ったのは確信犯的な冗談だったのだろうと推測されるのだ*²⁾。同じく古賀氏が指摘しているが、「カメ」は古来日本のある地方の方言では確かに「犬」を意味していた。実は、現行の広辞苑では削除されているが、その第一版(1955年)では、「方言として東北地方に存する。オッペケペー節『みそかの支払——抱いて』と言う記述が続いていたのだ。こういう次第で私は、現在流布している日本語辞典の外来語説に立つ「カメ」は異属言語間に生まれた faux amis であると思っている*³⁾。

いろいろな動物が持っているらしい仲間相互のコミュニケーションの手だてを一般に言語と呼ぶことがあるが、こんな駄洒落じみた faux amis の戯れが生じるのは人間の使う言語においてのみである。そしてそれを可能にするのは、人間の言語にのみ、フランスの言語学者 A. Martinet (1908-1999) が発見した二重分節の機能が備わっているからである。正確にいうならば、人間の知能あるいは精神が、自分が発する音声に二重分節の働きを持たせつつ言葉を生み出し、それを駆使して新たな意味の世界を築くことができるからである。言語がもつ二重分節の働きを学生に具体的に分かってもらうために私は「いろは歌」を持ち出すことにしている。この歌を平仮名で記すと〈いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうみのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす〉となり、日本語を構成する音が網羅されている(現代では区別されない音もある)。多くの人はいうえおの五十音図と同じ感覚でそらんじることができるが、意味は考えたこともないという人も少なからずいるようだ。音だけの分節のレベルで捉えればこれは意味のないハナモゲラ語である。しかしこれは別様に表すこともできる。〈色は匂えど散りぬるを、我が世たれぞ常ならむ、有為の奥山今日越えて浅き夢見じ、酔ひもせず〉というのがそれである。前者の場合は音の分節(理論的にはこれが第二次分節)であり、動物の鳴き声とは違って言わば順列組み合わせの操作が可能であることを示している。後者の場合は意味の分節(同じくこれが第一次分節)であり、このレベルで有意的な表現が生まれ、その表現を合理的に規則化する文法が成立する。こうした二段構えの装置があつてこそ、人間には、操作可能な数の音を使い、記憶のキャパシティにおさまる程度の数の概念(語彙)を組み合わせ、最終的には無限と言ってもよい意味の表現が実現できるのである。

こうした二重分節の働きは同一言語の中にとどまっているとあまり意識されない。他言語との接触がこの二重性を際立たせることがしばしばある。同一言語の中では必然的と思われていた音素と意味素のつながりが絶たれるからだ。そして faux amis はそこに生まれる。その際、こうした faux amis はコミュニケーションを阻害するものとして発生するわけではなく、言語間でのコミュニケーションが成立するからこそもたらされる楽しい副産物であることを知っておくべきであろう。そもそも誤解だってコミュニケーションの一部である(だから本来ディスコミュニケーションという語は英語にはない)のだし、faux amisのおかげでコミュニケーションが成り立つこともあるのだから。

私の母から聞いた話である。ある旅行会社では、海外ツアーに参加する日本人客に外国到着時の通関の際の知識として、「さいとーしんぐてんでーす」という表現を教えるそうである。母のように英語を解さない人にはこの音の連鎖は「斉藤寝具店でーす」と言っているように聞こえて難なく覚えられるという。なぜこんなことを教えるのかというと、この一連の音連鎖は入国審査の係官には《Sightseeing, ten days.》となって伝わるからというのである。そして実際にこれを口にして税関をパスしたという。はっきり定まったシチュエーションでの定型的表現だからこそなのだろうが、事実なのだそうだ。音のレベルでは酷似しているが、意味のレベルではまったく別物という例である。

人間が出せる音の数は限られているが、その分節のスタイルが言語によって異なるから、意味が皆目分からなくとも、音を聞いてそれが英語かフランス語かドイツ語かというおおよその識別ができる。そしてこのレベルで、音の連鎖としてある言語が美しいとか美しくないとかいった主観的な判断も生じてくる。次いで意味のレベルでの分節のスタイルはそれぞれの言語の文法として体系化される。こちらのレベルでは、習得するのが難しいとかやさしいといった機能面での優劣が語られることがある。しかし実際のところ、様々にスタイルを異にして存在する言語に対して、かたちの上であれ機能の上であれ優劣をつけることなどできるのだろうか。

19世紀には最も優れた国際語（ヨーロッパの共通言語）ともてはやされたこともあるフランス語を槍玉に挙げて、東京都の石原慎太郎知事が、「フランス語は数を勘定できない言葉だから、国際語として失格しているのもむべなるかなという気がする」と発言したことが物議をかもし、挙句は告訴され、慰謝料と謝罪を要求されているのは周知のとおりである。氏の本意はこの発言に続く部分、「そういうものにしがみついている手合いが反対のための反対をしている。笑止千万だ」というところ、つまり首都大学構想に批判的な都立大の仏語教育関係者を揶揄するところにあっただろうが、いずれにしてもこれが、同じく告訴された「ババア発言」や国際的響感を買った「三国人発言」に共通する他者を蔑視する差別的意識から発した侮辱的言辞であることには変わらない。氏が個人的に何を考えようと勝手だが、1200万を超える人間の代表者としてそれを軽々に口にして良いものだろうか。東京都民だけをとってみてもおそらくは数百万にのぼる心ある人々をして、氏の不遜な見解に無理やり同調させ、不当にもその代弁者を気取るようなものなのだから。それを不愉快に思い、黙っていることを潔しとしない人が現れたのも「むべなるかなという気がする」。滑稽なのは、石原氏がフランス語に対して自分が外国人であるという自覚がないらしいことである。外国人によるフランス語（に限らない他国語）侮辱発言など、要するにその言語をマスターできない人間のコンプレックスの裏返しでしかないのであって、正しく言い直せば「フランス語は数を勘定できない言葉」なのではなく、「石原氏はフランス語で数を勘定できない人間」ということでしかないだろう。

私もいまだにフランス語で数を勘定するのが苦手だが、それは自分のフランス語能力の不足のせいだという自覚は持っている。石原氏の発言を機に、フランス語の数の数え方の複雑さがいろいろ語られた。おおよそのところ、フランス語には70、80、90に当たる単語がないから、70をsoixante-dix (60+10)と言ってみたり、90を quatre-vingt-dix (4×20+10) などというややこしい言い方をせざるを得なくなったのだという説明であった(そして多くは、日本語の数え方だってややこしいところがあるから人さまのことをあまり言えないのではないかという具合にフラン

ス語に対して同情的であった)。石原氏の発言もその辺の事情を踏まえているのだろう。しかし、同情的か侮蔑的かはさておいて、実際のところこうした説明は事態の半分しか見ていない。実はフランス語には70を意味する septante という語があり、80を意味する octante (huitante というのもある)、90を意味する nonante が昔からあるのだ。ただし現在ではこれらの語はベルギーやスイスおよびフランスの一部地域で方言のようにしか使われていない。このことは何を意味するのだろうか。数の数え方も意味の分節レベルでそれぞれの言語が独自の規則を持って機能している。日本語で1970年というのも1970円と言うのも数字部分の数え方は同じだが、英語では同じでない(年号のほうは2桁数字の組み合わせ)といった事態がその例である。

数の数え方も文化現象としての言語的営為なのであり、そのスタイルはそれぞれの言語文化の中で選び取られるものなのであって、そのときに一面的に合理的と見えるものが必ずしも選ばれるわけではない、ということだろう*4)。外国人としてのわれわれは、その文化の中に入っていくか外にとどまるかは自由に選ばよいが、いずれにしても、不出来な自前の定規を外からあてがって、独り呑み込みの評価を下しているにすぎないのに、相手を知り尽くしているような顔をする愚は避けたいところである。

異なる文化の出会いの中で faux amis が必ず生まれてくる。人間のコミュニケーションには誤解や無理解がつきものであり、言葉が違えばなおさらのことだからだ。しかし、faux amis の存在はコミュニケーションの失敗や挫折を証しするものではない。本当のコミュニケーションが達成されるためにはさらなる理解の努力が必要なことを教えてくれる、よそ者だが近しく感じられる「空似の友」なのだ。異文化との出会いの中で出会ったこの faux amis を、ろくに理解しないままやみくもに拒絶するのは大人げない。Faux amis と正しくつきあうことで、よりよく相手を知りおのれを知ることもできるはずである。

[注]

* 1) 古賀達也:「「カメ」(犬)は『外来語』か」

<http://www.furutasigaku.jp/jfuruta/kaihou47/koga471.html>

* 2) アメリカ人が飼っている犬を「カメヤ」と呼んだら寄ってきた、だから洋犬は亀だということである。この手の冗談はどこにでもある。いつかテレビ番組の「トリビアの泉」で、フランス人は5キロのことを「サンキロ」と言う、ということが紹介されて、そこで独協大学の伊藤教授が登場して「そうなのです」と言明なさっていた。音節のレベルではまさにそうなのだ。御念の入ったことに一人のフランス人が実際に東京の肉屋さんで「サンキロ(フランスでなら5kg)ください」と注文して「サンキロ(日本では3kg)」受け取り、確認された。実にトリビア(瑣末)な話だが、ここにも faux amis がいたのだった。

* 3) ○ 広辞苑第1版にはあった方言に関する記述が現行の版で削除されたについては、「カメ」が方言としても死語と化したからだろうという解釈もあるかもしれないが、本質的なことは、外来語説に立つならば同時に方言としても説明するのは不要であり、一貫性を欠くからだろう。

○ 「カメ」をめぐる古賀氏の指摘は事実として傾聴すべきものとする。ただ、氏の説は、昭和23年頃に見つかった、実は古代、津軽の地には大和朝廷に対抗する東北王朝があったという内容を伝える『東日流外三郡誌』を偽書とする見解を批判するものとして出されているようだが、この古史古伝中に古代津軽弁で犬のことをカメと呼んだと記されていた一事をもって偽書説を覆すことには無理があるだろう。「カメ」が百パーセントの外来語でないのは本当たとしてもである。

* 4) 数え方に絡んで言うならば、世にはメートル法のみでなく、尺貫法もヤード・ポンド法もあった(ある)ことを想起してもよいだろう。合理性と一貫性が必ずしもイコールであると言えないとしたら、どの単位系

Faux amis (フォザミ) 考

が優れているかなどと競い合うこともないだろう。(日本でも)簿記では大きな数を3桁区切りで表記するが、日本語の数の数え方は4桁区切りで進行するから、合理的とは言えまい。3万円はどうして¥30 000と表記されるのか(30千円と読みたくなる)。これはフランス生まれのメートル法に従って以来のことなのだ(それ以前は4桁区切りで表記していた)。ヤード・ポンドの単位系は今でもちゃんと生きている。60秒=1分、1日24時間という数え方がそれである。数の数え方を知ること異文化交流と言えそうではないか。